

第四編 統一的官僚国家——マウリヤ王朝

時代の概観

アレクサンドロス (Alexandros) 大王は西紀前三一七年に西インドに侵入し、諸所に都会を建設したが、麾下の将兵がそれ以上の行軍を頑強に拒んだので王は軍勢を引き連れてインダス河を下り、翌年西方に帰還して、前三二三年七月バビロンで客死した。

当時ガンジス平原における最大勢力はマガダ (Magadha) 国であり、ナンダ (Nanda) 王朝の支配下にあったが、西紀前三一七年ころに同国の一青年チャンドラグプタ (Chandragupta) が同王朝を覆して近隣諸国を併呑してマウリヤ (Maurya) 王朝を創始した。彼はさらに西北インドからギリシア人の軍事的勢力を一掃し、侵入して来たシリア王セレウコス・ニカトル (Seleukos Nikator) の軍隊を撃退し、ほぼインド全体にわたる最初の大帝国を建設した。このような成功は、当時インドの穀倉と称されていたマガダ国の豊かな財富と特殊な戦車などを利用したすぐれた軍事技術がその有力な原因となつたのではないかと想像されるが、直接には彼の賢明な宰相カウティリヤ (Kautilya 別名 Chanakya)

の面策に負うところが多かったといわれる。

チャンドラグプタの孫、アショーク (Ashoka) 阿育、在位年限は前二六八—二三二年) のときにマウリヤ王朝の勢威は絶頂に達した。彼はさらに東南海岸のカリンガ (Kalinga) 国をも平定した。この王朝はアショーク以後勢威が衰えたが、前一八〇年ころまで続いたらしい。諸外国と使臣を交換し、エジプト・シリア・ギリシアなどの諸国とも相当密接な外交交渉のあったことが知られている。

この王朝はインド史上空前の強大な国家権力を以て、重要な諸事業を遂行した。たとえばチャンドラグプタは全インドにわたって多数の公路を建設し、駅亭を設け、また約半里ごとに標識としての柱を建てた。またアショークは各道路に沿って並木を植え、約三里半ごとに井戸を掘り、旅人のための休憩所を設けた。道路の主要交叉点には、国家の倉庫を建設し、物資を収納して緊急の際の用に供し、また農産物の増加をはかるために運河や貯水池を造った。

インド全体が史上はじめて統一国家に形成されたのは、実にマウリヤ王朝の時代(西紀前約三二七—一八〇年)においてであった。マウリヤ王朝を基準としてのみ、古代インドの歴史を構成し想定することができる。仏教は本来普遍的宗教としての性格を有するものであったが、現実には世界宗教となるべき活動力を与えられたのは、実にマウリヤ王朝のアショーク王のときであった。このように重要な文化的意義を有するマウリヤ王朝時代の国家体制ないし社会構成が、いかなるものであったか、それをここにおいて瞥見してみたい。もともとインド文化史においては、王朝の占める意義は、他の諸文明国におけるように重要なものではないけれども、このような考察を行なうことは、社会的現実の解

明のためにぜひ必要なことであると思われる。

(一) Maurya は、日本語では「マウリヤ」と発音したほうが原語に近い。arya を「アーリヤ」と発音するのと同様である。その理由については本選集第5巻『インド史』I、一一〇ページ参照。

Maurya を漢訳仏典では「孔雀」と訳し、この王朝のことを「孔雀王朝」と呼ぶ歴史家もあるが、それは Maurya という語がプラークリット語の mora (≡ Skt. mayūra 孔雀) に由来するという通俗語源解釈にしたがっているのである。しかし異説もある。また孔雀を標識として用いたのは、後世のグプタ王朝である。したがって混乱を避けるためには、「孔雀王朝」という呼称は用いないほうがよい。